

# 長崎・中島川アーチ石橋群の 水害復旧を巡る考察 — 技術から文化への架け橋 —

ON THE RESTORATION OF THE STONE ARCH BRIDGES IN NAGASAKI  
AFTER THE 1982 FLOOD  
BRIDGE FROM TECHNOLOGY TO CULTURE

正木晴彦<sup>1</sup>・石崎 勝義<sup>2</sup>・糸永貴範<sup>3</sup>

Haruhiko MASAKI, Katsuyoshi ISHIZAKI and Takanori ITONAGA

<sup>1</sup> 正会員 文修 長崎大学教授 環境科学部文化環境講座 (〒852-8521 長崎県長崎市文教町 1-14)

<sup>2</sup> 正会員 工博 長崎大学教授 環境科学部環境設計講座 (〒852-8521 長崎県長崎市文教町 1-14)

<sup>3</sup> 学生員 長崎大学大学院工学研究科 (〒852-8521 長崎県長崎市文教町 1-14)

Many of arch-stone-bridges of Nakashima River in Nagasaki were swept away by the 1982 flood. The original plan of restoration shown by local administration was to widen the width of the River and to construct modern strong concrete-made bridge instead of the traditional one.

"Restruction Committee" was organized by a lot of citizens, scholars and students just after that disaster. Making the detailed inundation map, they made unique counter proposal to the Mayor. At that time, the proposal included a new idea to aim the harmony of security in flood and amenity of cultural environment such as history, scenic and natural beauty.

This paper describes a trial to make bridge from technology to culture through cooperation of administrators with citizens.

**Key Words :** Arch stone bridge, river restoration, riverside festival, amenity and security, city planning, collaboration of citizen and administrator, Nakashima river

## 1. はじめに

副題を『技術から文化への架け橋』としたがこれは暗に、二つの両岸をつなぐ「21世紀への架け橋」という含みを有している。つまりアーチ石橋を媒介にしてテクノロジーと精神文化という二つの文化の両岸をつなぐことによって、社会的に貢献せんとするものである。

周知のようにギリシャの昔にはこの二つは一体であり、philo-sophia といえは人文科学や自然科学を含む知恵一般を愛求する学問そのものであったが近世初頭のデカルト (René Descartes 1596-1650) による物心の二元論の主張以来両者は別個に展開し、特に精神や靈魂から完全に開放された命なき「物」

については実験を主とする具体的な方法で研究が進められ、その結果二つの岸は益々遠ざかってしまったのである。

生命科学の分野で約30年前にポッター (V.R Potter "Bioethics, Bridge to the Future" 1971) が提唱した両岸の橋渡しは「街作り」や「災害復旧」においても今後重要な意味を持ち、長崎にあってはアーチ石橋がその具体的なシンボルであると思う。

## 2. 昭和57年洪水に依る市内の浸水と石橋の破損状況

昭和57(1982)年7月23日の豪雨による中島川の石橋群を始めとする被害は次の通りである。(図-1, 図-2)

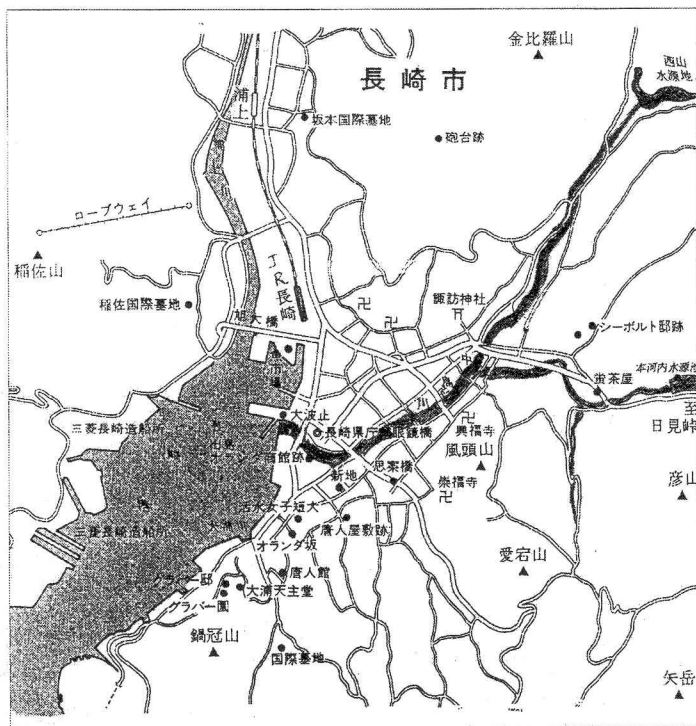


図-1 長崎の旧市街地

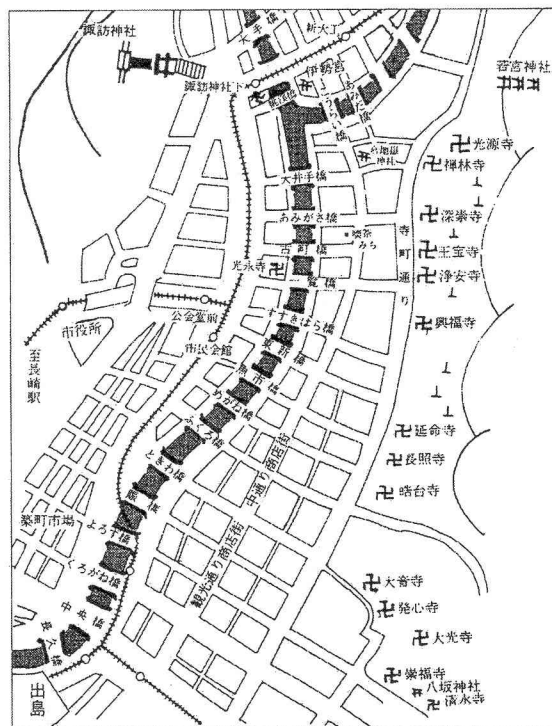


図-2 長崎・中島川と石橋群



図-3 天端が流失した国宝眼鏡橋

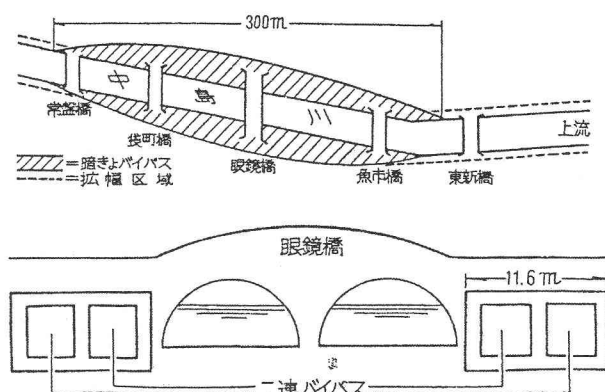


図-4 左岸側バイパスは未完成

a) 石橋全壊 (6 橋連続)  
上流から列举すると大井出橋, 編笠橋, 古町橋, 一覽橋, 芋原 (すすきはら) 橋, 東新橋。

b) 石橋半壊 (3 橋)  
合流地点の直前に架かる桃溪橋, 眼鏡橋 (図-3) 及びそのすぐ下流の袋橋。

c) その他の被害  
中島川流域に於ける死者は市内全体の死者 262 名の中数名であり, 家屋流失 (岸から川に突出したもの) が 3 戸の他道路の損壊あり。

以上の結果, 眼鏡橋の一つ上流の魚市橋 (当時石橋として再建の為の運動中) を含め, 11 橋連続したアーチ石橋群は完全に分断されて了った。

その後の簡単な経過を追ってみると次のようになる。

- ・「中島川復興委員会」が水害から 10 日も経たぬ 8 月 1 日に発足。(中島川を守る会+中島まつり実行委員会)

- ・「流失石橋の石材集め」が 8 月末に, 青年会議所により開始される。

- ・石橋復元のための「石橋デザインコンクール」が復興委により, 10 月中旬実施される。

- ・眼鏡橋については「文化庁が現地復元の補助金交付」を発表 (11 月)

- ・12 月に入ると県が「暗渠バイパス計画」を提示。(図-4)

- ・昭和 58 年 1 月長崎市は, 川幅の拡幅に伴い,

表-1 大水害までは残っていた江戸期の石橋

| 石橋名  | 架設年  |
|------|------|
| ▲眼鏡橋 | 1634 |
| 高麗橋  | 1652 |
| ▲一の瀬 | 1653 |
| ▲袋町橋 | 1655 |
| 一覽橋  | 1657 |
| ▲桃溪橋 | 1679 |
| 芋原橋  | 1681 |
| 阿弥陀橋 | 1690 |

(現存は4橋▲印)

眼鏡橋、桃溪橋以外は、8橋を新石橋で3橋をコンクリート橋とする原案発表。

結果として曲りなりにも石橋は復元されたのであるが上記2橋を除けばアーチが巨大化し、地上に高く架かる太鼓橋の様相を呈し将来何らかの手直しが必要となった。我々は目下、アーチの縮小を含む、河川全域のオープンミュージアム構想を検討中である。

### 3. 災害復旧の河川改修と石橋群の存在 —中島川アーチ石橋群の文化的特徴—

アーチ石橋技術の伝来源や伝播の経路に就いては色々な学説がある。起源についてはローマ、中近東・中国説、伝播ルートに関しては南欧—長崎、中国—長崎、朝鮮半島経由説、あるいは中国—沖縄—鹿児島説などである。筆者は諸説を吟味の上、一応「中国→長崎→熊本→鹿児島」のルートであると推定しているが主題とは直接関係しないので詳論は省きたい。

長崎大水害による石橋の被害及びその後の復興経過は先に述べた通りであるが、問題は何故に一見時代逆行的な石橋の存在に固執せねばならぬのかという点である。以下でそのような疑問に答えるべく主として石橋群の文化的特徴について箇条書きにしてみた。

(1) 眼鏡橋を始めとして、何れも現存する我国最古のアーチ石橋であり、大水害迄は1600年代に架設された石橋が多数残っていた。(表-1)

熊本、鹿児島藤原林七や岩永三五郎を始めとする石工によるものはほとんど1800年代に入ってからである。沖縄には更に古いものがあったが、先の太平洋戦争で破壊され現存しないらしい。

表-2 外国人が寄贈した初期の石橋

| 石橋名  | 寄贈者 |
|------|-----|
| 眼鏡橋  | 僧如定 |
| 堂門橋  | 高一覧 |
| 高麗橋  | 平江府 |
| 一の瀬橋 | 陳道隆 |
| 鳴滝橋  | 林守堅 |
| 一覽橋  | 高一覧 |
| 二木合橋 | 何高材 |
| 常盤橋  | 魏爾善 |

表-3 阿弥陀橋以後に日本人により架設された石橋

|      |
|------|
| 古町橋  |
| 大井出橋 |
| 編笠橋  |
| 魚町橋  |

(2) 中島川の石橋は、初期の段階で日本人ではなく外国人(中国人)の僧侶等が寄贈したものである。大洪水の前迄存在したものを含めれば表-2のように8橋も続き、やっと、1690年になって始めて日本人たる園山善爾が「阿弥陀橋」を架けているのである。これは極めて異例のことであり、他地方の河川には見られぬ点である。

(3) 一旦、日本人が架けると、表-3のように10年位の間に次々と建造されている。処が施工主は役所などではなく、かと言って大分の虹潤橋こうかんきょうの如く、お上の命令で豪商たちが泣く泣く出資したのでもない。民間の篤志家や貿易商、一母親、罪人の贖罪など、石橋の寄贈者や架設の自主的な動機がバラエティに富んでいる。

(4) 橋名の由来が興味深い。江戸期に旧市街地の真只中を流れていた為に、第1橋、第2橋といった番号橋や、一文字だけを変えた古利根橋、新利根橋、大利根橋、利根大橋という紛らわしい橋名や、架設地の町名を冠したのみのお座なりの命名は少なく婉曲的かつロマンチックな名前が多い。

例えば

・編笠橋：対岸の遊廓へ笠で顔を隠して渡った。

(cf. 思案橋→思い切り橋)

・阿弥陀橋：処刑場へ向かう囚人の為に、お堂付きの橋を捧ぐ。



図-5 偏平で渡りやすいが断面阻害率は高く、もろいといわれる。図は袋町橋

・その他：さらし首伝説、カンパや罪滅ぼしの托鉢による橋や、カップが守ったとの伝説のある石橋などがある。

(5) 橋名のユニークさのみならず、一つ一つの橋に<sup>はた</sup>ふげんか、セーラエン力遊び、出会い、出店、などのエピソードが多い。また、川幅が狭く、比較的小型な橋であるため、必ずしも大富豪でなくても寄附可能であり、それだけ、架設にまつわる逸話が多い。中には一人で2橋も架けた人（高一覧）もいる。

(6) 眼鏡橋以外は半円形ではなく全てアーチが1/3 円に近い比較的扁平な姿（図-5）をしており、兩岸からほぼ水平に渡れるので太鼓橋の様な抵抗感はない。但しその為には両橋桁が川底に達し、流水断面の3 割近くを阻害し、流失の危険も多かったが、形としては非常に優美である。

(7) 市街地に在って多くの市民の生活に溶け込んでいるので、地唄や民謡にも詠まれ、絵等も多い。「長崎ぶらぶら節」「中島川音頭」「長唄中島川」「オペレッタ桃溪橋」（全50 曲）の他、最近の歌手による演歌もある）

#### 4. 災害復旧工事の「前史」

##### 一何故に保全、復元されたのか一

正確に言えば、架設当時のままの姿で保全、復元されたのは上流から、桃溪橋、眼鏡橋、袋町橋の三橋のみである。前者は合流地点より上流のため川幅は変わらず、そのまま復元され、後の二者は右岸に暗渠バイパスを作った為に川幅がこの区間のみ拡幅されず、そのまま残る事が出来た。その他については

「石橋」にはなったが、橋桁も河川断面を阻害せぬよう道路面から立ち上げたために大型化され空中高くそびえるアーチになってしまった。中には流失しなかったのに作り直された橋もある。

##### (1) 地形的要因

坂の長崎では、中島川を囲む三方が山で、河口となる海へ向かって流れるのであるが、流れの長さは僅か数キロメートルであるから、梅雨期の流量や速度は相当なものであり、架橋当時から、橋を永久的な構造物とは誰も考えていなかった筈である。即ち、根気良く、何回でも再架設するという伝統も日本の特に、坂の長崎の地形的環境から人々が学んだものであったと思う。それが、昭和の大洪水にも辛うじて生かされたとも言えるしかない。

##### (2) 文化財としての理解

次章で触れるように地元市民の間にかなり文化財としての認識が広がっていた。

##### (3) 地域からの働き掛け

###### 一諫早・鹿児島と比較して一

一言で言えば、諫早の場合（昭和32 年7 月）は戦後の復興期であり、大水害で追い打ちをかけられた市民や行政側には、ごく少数の人々の先見的な提案を受け入れる精神的なゆとりが無く、目先の安全性と便利性（水平で渡り易い）や経済性（コンクリート製の方が安上がりで長持ちする）のみで復興が進められたのも無理からぬことであったと思う。但し、その中から山口祐造氏という能吏が誕生し、とも角も諫早の眼鏡橋は旧橋近くの公園内に復元保存され、その技術と経験が丁度四半世紀後の長崎の中島川石橋群復興の大きな力となった事を忘れてはならぬ。

次に鹿児島との比較であるが、彼の地に於ける石橋群を生かした街作りの運動の歴史については特に比較すべき詳細な資料を持ち合わせぬ為、論評は控えたい。以下で長崎の場合の簡単な経緯を記しておく。

##### (4) 大水害以前の長崎・中島川石橋群を生かした街作り運動

長崎の場合、河川や石橋が程よい規模であった事も見逃せない。（橋からぶら下がったり、飛び込んだりした経験を持つ人は多い）

・昭和26 年の「国際文化都市計画」の道路立案により、昭和39 年に長崎市は「長崎市都市計画宮ノ下地区区画整理事業」を事業決定したが、国道と市道の拡幅ついでに、これと近接して平行する中島川

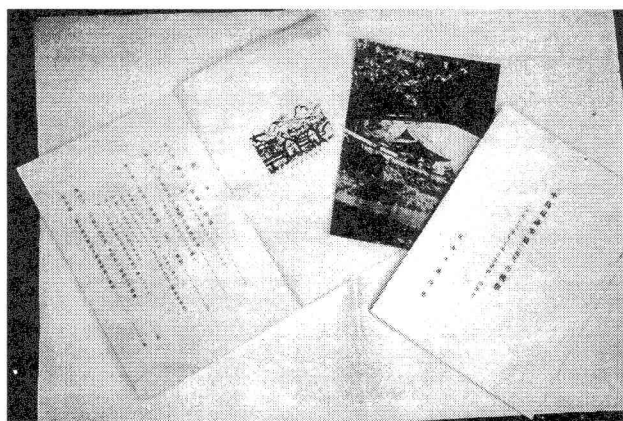


図-6 昭和 39 年に出された「中島川遊歩道の構想」

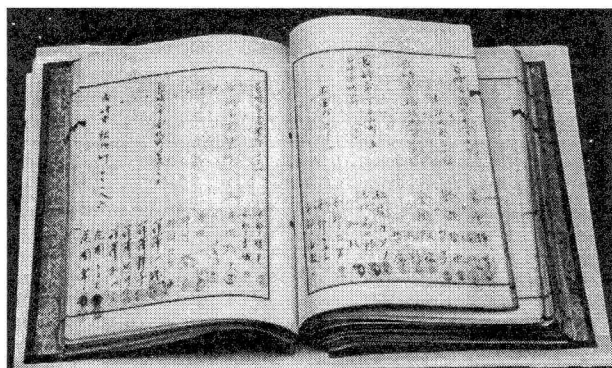


図-7 昭和 40 年 3 月、7000 人の署名を集めた市長宛の陳情書

沿いの子供の遊び場や風致を壊して車道を新設する計画となった。

・当時ドブ川と化した中島川は市民のやっかい者となり、暗渠にして駐車場や高速道路にせんと案も論議されていた。

処が、事前に一言の相談も了解も得ずに進められた計画に対して、長崎最古の名利から反対の声が上がり、街作りの理念を説く積極的な代案が出され、「中島川遊歩道の構想」という小冊子(図-6)となって広く配付された。「公害」なる語の登場する6～7年も前のことである。

翌40年3月には7,000人の署名(図-7)を添えて市長に再考を求め陳情したが為政者を動かすには至らなかった。

・その頃、長崎造船大学(現、長崎総合科学大学)の岡藤良敬教授を中心とする「石橋研究グループ」が石橋の来歴や実測を開始。やがて同大学の片寄俊秀教授のゼミでは、調査から一步を進めた「石橋保存の為の地域計画に関するアンケート」をする学生が出現。彼等は意外にも、流域住民の8割が遊歩道構想に賛同している事を発見した。

・昭和48年に入ると突如としてブルトーザーが、

上、下流から工事を開始し、江戸期の護岸や欄干は次々とコンクリート製に作り変えて、車道工事の準備が始まった。

・かくして「中島川を守る会」は発足する。

車道工事によりダンプカーによる石橋破損事故続発し、石橋研究、交通・環境・風致問題に個別に取り組んでいた市民や学徒、それに破損を目のあたりにした川沿いの市民等が手をつないだのである。

・折しも開会中の定例市議会に対し、車道工事完了部分を試行的に遊歩道化(緊急車は例外)と言う具体的な「請願書」を提出したが、委員会では採決、本会議では21対23のまれに見る与野党横断的な僅差で不採択となった。

・この請願否決はかえって大きな反響を呼びおこした。これは、地元の私学が地域社会と密接な関係を有しつつ、他方で、文科系の研究者とも連帯して、科学技術そのものの在り方への反省に立って、従来の都市計画の進め方に対する根本的な見直し水と緑を生かした、豊かな街づくりの為の理念を重視したものである。

・昭和48年8月26日、長崎青年会議所の呼びかけで花火を合図に一斉に一万人が中島川の清掃に着手、3年後には、全県的な「クリーンアップ大作戦」に、21万人が汗を流した。川の浄化装置取り付けや行政への不満よりも、この市民自身による「一掃き運動」のインパクトは水害後の石橋復旧にも大きな力となっている。

・清流が戻れば生き物をとということになる。当時のスクラップブックを開けて見ると、中島川への放流は記事になったものだけでもその後の8年間に、鮎、鯉、メダカ、蛍、あい鴨、あひる、タニシ、どじょう、など30回を越えている。

・請願はその後の3年間に5回出されたが、何れも小差で否決されたが、運動は多彩な展開をとげた。

・地元の生徒による毎日の「水質調査」や「浄化のアイディア」の掲示、「石橋の調査」「保存への提言」、さらには中島川「文化講演会」「川端シンポジウム」「魚市橋再建の構想」機関誌「中島川を守る」や「リバーサイドプロムナードの提唱」の出版、はては、「中島川芸術集」「スケッチ大会」「中島川音頭」による石橋上での盆踊り大会、フォークソング「川を返せ」、長唄「中島川」や「中島川絵葉書セット」「中島川ガイドブック」も登場、かくして、この運動は人々の視聴覚にも訴えつつ、楽しく、生き生きと進められた。風致を重んずる立場から、立て看板やビラ、ポスターは殆ど見られなかった。

・やがてこれは片寄教授らの発案により「中島川まつり」に発展する。5月の連休に、今でいう歩行



者天国を全国に先がけて実現したのである。大井出橋から袋橋の間には「子供の広場」「リサイクルショップ」「手作りコーナー」「ヤング広場」など70の露店が並び、祭りの前後には川の清掃が実施される。

・まつりに続いて、石橋に伝わる実話をもとに、市民グループの創作、演出による戯曲「桃溪橋」の上演は圧巻であり、超満員の市民会館はこの時、主人公が「人間の街づくり、川の浄化、魚市橋再建」を訴えて登場すると異様な熱気に包まれた。2年後の昭和54年には同じ会場でオペレッタ「桃溪橋」が、ママさんコーラス80名の為に伴奏曲50曲と共に披露される大フィーバーとなった。

・これ等の運動に対して、昭和54年、第一回「サントリー文化賞」が贈られ、広く世間に認知され、市当局も「中島川公園整備計画」について、守る会の意見を聞くべく20万円を出して委託研究に踏み切り、結集された英知は昭和55年3月に部厚い報告書となって市長に届けられた。官・学・民が共に同じ目的に向かって手を取り合い、蛍のための川ニナ養殖や水量確保や簡易浄化法などに着手せんとした矢先に、未曾有の大水害に見舞われたのであるが、これ迄につちかわれた諸々の努力の成果は流される事なく、復旧計画の中に少なからず生かされたものと思う。

## おわりに

要するに他市よりも長崎において比較的スムーズに「石橋を現地で再現」（決して十分ではないが）できたのには次の様な理由が挙げられよう。

1. 長崎大水害で石橋が壊れる10数年も前から地道な石橋調査や語らいが学者や市民・学生を中心に続けられていたと言う「蓄積」があったこと。

2. 当初は、歴史的文化遺産や風致を生かした「楽しい街作り」から出発したが、水害後は、アメニティーとセキュリティー、すなわち文化的快適環境と災害に対する安全性の調和というしっかりした「理念」をもとに文科系、理科系の知恵を結集しえたこと。

3. 石橋を保存し、生かす為に、河川の清掃を定年化し、川を取りまく環境（文化的、自然的、社会的）を見ずえて、広い視野から流域一体の活性化を

目指したこと。

4. 子供たちが水に親しめ、弱者が安心して通れる・・・と云うしっかりした目標を有し、かつ、「まつり」の実施によって、楽しくこの運動を持続しえたこと。

5. ややもすると、この種の住民運動は行政側と対立する（反権力的？）活動となりがちである。長崎の場合も、出発点は市当局の立案した計画とその実施への反対運動であり、請願書の不採択が続くなど、「反市議会」や「反行政」の形をとっていたが、後には市当局からも研究委託金が交付されるなど、民・学・官が協力して街作りが進められ、この点では全国に先駆けての20年早い試みであったと断言できる。そしてその民主的な協力関係が後の災害復旧に生かされた点に思いをいたし、河川整備の理念の一例として取り上げた次第である。

## 参考文献

- 1) 長崎・中島川復興委員会編：よみがえる中島川，長崎中島川復興委員会機関誌，No.1-8号合冊，同会発行，1982。
- 2) 長崎・中島川復興委員会編：(続)よみがえる中島川，長崎中島川復興委員会機関誌，No.9-10合冊，同会発行，1983。
- 3) 太田静六編：石造アーチ橋の伝来経路，九州のかたち・眼鏡橋・西洋建築，西日本新聞社，1979。
- 4) 片寄俊秀：ながさき巡歴，NHKブックス，1982。
- 5) 山口祐造：九州の石橋をたずねて，昭和堂出版，1976。
- 6) 村田明久：中島川復興計画，環境論叢，No.8，pp.54-58，長崎総合科学大学環境科学研究所，1983。
- 7) 正木晴彦：道あれこれ，長崎・中島川と石橋群，No.2，中島川を守る会，pp31-34。
- 8) 正木晴彦：道づくりに思う，PHP誌，No.305，pp.9-10，1973。
- 9) 正木晴彦：石橋とまつりの町，VOICE誌，No.32，pp.151-163，1980。
- 10) 正木晴彦：石橋群のロマンを映す川，河川文化，No.5，pp.2-11，(社)日本河川協会，1999。
- 11) 正木晴彦：河川環境と文化—中島川アーチ石橋技術の伝播ルート推察と橋を巡る文化的背景の検討—，環境と文化，九州大学出版会，2000。

(2000.4.17 受付)